慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集：「戦争と人間」まえがき
Sub Title	Vorwort zum Sonderthema ,,Krieg und Mensch"
Author	寺尾, 恵仁(Terao, Ehito)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.32 (2015. 3) ,p.1- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：「戦争と人間」
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20150331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「戦争と人間」まえがき

寺尾恵仁

第一次世界大戦の開戦から 100 年が過ぎた。ドイツとオーストリアの、言わば「集団的自衛権」の行使によって始まったこの戦争は、従来の「主権国家の正規軍同士による外交の一局面としての戦闘行為」という戦争概念を根本から変容させる「総力戦」となった。以来 100 年間の年表には、革命と内乱、紛争と虐殺、テロと報復が絶え間なく並ぶ。

トーマス・マンは、1918 年初版『非政治的人間の考察』の中で、この大戦を「文明の帝国主義」に対抗する「ドイツ的なるもの」による抵抗の戦争と呼んだ。文明と野蛮の衝突ではなく、文明に対する文化の戦いであると。[1] 彼は西欧の自由民主主義理念ならびにドイツ国内の社会民主党や「進歩派」と目される知識人達を徹底的に非難攻撃する。(「要するに、「デモクラシー」などという外国産のいまわしいスローガンは、まっぴらごめんだ！」[2]) ところが、そのわずか 4 年後に、「ドイツ共和国について」と題した講演で、彼は「共和国」としての「ドイツ・デモクラシー」支持を表明する。いわゆるトーマス・マンの「転向」である。この事実は言うまでもなく、一人の反動的国粋主義者が自由民主主義者へ「進歩」したというような単純な図式で語られるべきものではない。巨大な歴史の流れの中において、政治と芸術の中間で足を止め、作家として「生涯で最も苦しい

---

1) トーマス・マン『非政治的人間の考察　上』前田敬作・山口知三訳、筑摩書房、1968、57-74 頁参照。

2) トーマス・マン『非政治的人間の考察　中』前田敬作・山口知三訳、筑摩書房、1969、94 頁。

数年間」[3] を過ごした彼の悪戦苦闘に、真正の保守主義者としての一貫性を見る事も、自己矛盾の揺らぎを読み取る事も、どちらも可能だろう。

ドイツ文学研究の場において「戦争と人間」というテーマについて論じる時に、トーマス・マンの苦闘は、今もって我々に多くの問いを投げかけてくれる。一つには、戦争という巨大な悲劇的状況に対して、加担か反抗かといった二者択一を迫るのではなく、決定の前で立ちすくみ「ためらう」事に関わる問題である。ヨーゼフ・フォーグルは、「例外状態における決定」という政治神学のテーゼに対して、「ためらい」の持つ重要性を論じる。知覚と運動および感知と反応の中間地点、出来事の連続性が中断される「ためらい」の瞬間において、「決定」という概念の持つ意味と問題性が問い直される。[4] そうした「余白」や「遊び」の意義を再認識する事が、学問の場における一つの取るべき態度であろう。

そしてもう一つは、悲劇を回避しようとする近代的努力そのものが新たな悲劇的経験を引き起こすという「悲劇的イロニー」の問題である。カール・シュミットは、第一次大戦の如き総力戦を回避するための政治的方途、すなわち戦争の違法化と共同制裁の正当化が、逆に戦争と平和との区別を不分明にし、結果として「世界内戦」という形の新たな総力戦を生み出すとして、国際法の欺瞞を厳しく批判する。[5] シュミットが危惧した通り、あるいはさらに悲惨なことに、現代の戦争は、テロリズムや宗教原理主義や貧困やグローバル金融資本との終わりなき総力戦である。国家間においてももはや「平時」は存在せず、情報や文化を媒介とした闘争、あるいはエルフリーデ・イェリネクが辛辣に描き出したような、スポーツとナショナリズムと市場経済の醜悪な結びつきという形での闘争が絶えず行われる。

故に「〈非常事態〉が実は通常の状態」[6] というベンヤミンのテーゼは、

---

3) 『非政治的人間の考察　上』14 頁。
4) Joseph Vogl: *Über das Zaudern*. 2. Aufl. Zürich-Berlin 2008, 14-16 頁参照。
5) 大竹弘二『正戦と内戦』以文社、2009、142-151 頁参照。
6) ヴァルター・ベンヤミン『歴史の概念について』、『ベンヤミン・コレクション 1』所収、浅井健二郎編訳、筑摩書房、2013、652 頁。

現代においてますます重要な問題提起として響いて来る。現代の戦争とは、異なる正義・異なる価値観・異なる文明同士の衝突という、「自己」と「他者」の衝突として捉えることはできない。自由民主主義社会の中で育った青年が狂信的テロリズムに身を投じるように、「自己」と「他者」という関係そのものが成り立たない瞬間、自己の内に潜む他者、他者に反映される自己というねじれた関係がむき出しになる瞬間が、現代の戦争と言えるのではないか。そこにフロイトの「内密にして－慣れ親しまれたもの、抑圧を経験しつつもその状態から回帰したもの」[7] としての「不気味なもの」という概念を当てはめる事もそう的外れではないだろう。演劇学の領域では、現代の悲劇における「秩序の震撼」[8] というハンス＝ティース・レーマンの言葉が思い起こされるかもしれない。

特集「戦争と人間」では、第一次大戦のみならず、多様な歴史的・人間学的視座から、戦争という矛盾を孕んだ運動状態について考察される事となる。フランシス・フクヤマの言うように、戦争によって社会システムの統一化・合理化・効率化が要求される事で近代国家という政治体制が構築されていったと考える[9] ならば、戦争について問う事はすなわち近代について問い直す事でもあるだろう。第一次大戦から 100 年という年に、戦争と人間の関わりについて――ドイツという媒体を通して――問いを立て論じる事、恐らくはそれが、ドイツ語／文学／歴史／芸術を学ぶ我々の重要な課題である。

慶應義塾大学文学研究科独文学専攻後期博士課程在籍
同独文学研究室『研究年報』第 32 号編集長

---

7) ジークムント・フロイト『不気味なもの』、『フロイト全集 17 巻』所収、藤野寛訳、岩波書店、2006、42 頁。

8) Hans-Thies Lehmann: *Erschütterte Ordnung*. In: *Das politische Schreiben*. Berlin 2002. 22-37 頁参照。

9) フランシス・フクヤマ『歴史の終わり　上』渡部昇一訳、三笠書房、1992、137-142 頁参照。

Vorwort zum Sonderthema „Krieg und Mensch“

TERAO, Ehito

100 Jahre nach Beginn des Ersten Weltkriegs, der als „totaler Krieg“ den Begriff des Kriegs grundsätzlich verwandelt hat _ seitdem wird die Zeittafel durch eine ununterbrochene Folge von Bürgerkriegen, Genoziden, Terror und Rache gefüllt.

Obwohl Thomas Mann noch 1918 den Ersten Weltkrieg als Widerstand des „deutschen“ Geistes betrachtet hatte, erklärte er nur vier Jahre später seine Sympathie für die deutsche Demokratie. Diese Tatsache soll man natürlich nicht einfach so deuten, dass es einen Fortschritt vom reaktionären Nationalisten zum liberalen Demokraten gegeben habe. Man kann in Thomas Manns Veränderung sowohl Entwicklung als auch Selbstwiderspruch finden, einen Autor, dessen Position im großen Fluss der Geschichte zwischen Politik und Kunst oszillierte.

Wenn man in der Germanistik das Thema „Krieg und Mensch“ diskutieren will, kann man ganz unterschiedliche Aspekte privilegieren. Interessant ist etwa das „Zaudern“ (Joseph Vogl), wo es nicht um die Dichotomie zwischen Widerstand gegen und Teilnahme am Krieg geht, sondern um ein Stillstehen vor der Entscheidung. In der Wissenschaft sollte man die Wichtigkeit des Spiels oder der Leere im Augenblick des Zauderns wieder erkennen.

Zweites gibt es das Problem der tragischen Ironie: dass die Bemühungen um das Vermeiden einer Tragödie neue tragische Erfahrung hervorrufen kann. Carl Schmitt behauptete, dass die politischen Aktionen für die Vermeidung des Kriegs eher die Grenze zwischen Krieg und Frieden verwischten und den „Weltkrieg“ herbeiführten. Ein Fingerzeig, dass der heutige Aggregatzustand des Krieges:

Terror, Fanatismus, Armut oder globalisierter Kapitalismus, womöglich noch schlimmer ist.

Daher ist die These von Benjamin über den Ausnahmezustand immer wichtiger geworden. Der heutige Krieg kann kein Gegensatz mehr zum Frieden sein. Vielmehr kann man sagen, dass der Krieg nunmehr ein Augenblick sei, dass der Zusammenhang zwischen eigen und fremd nicht mehr funktioniert, so schnell wie junge Menschen heute von der demokratischen Gesellschaft zum fanatischen Terrorismus überwechseln.

Beim Sonderthema „Krieg und Mensch“ wird die widersprüchliche Bewegung des Kriegs in vielfältigen Perspektiven diskutiert. Entsprechend der These von Francis Fukuyama, nach der die modernen Staaten durch den Krieg systematisiert wurden, soll die Frage nach dem Krieg gleichzeitig auch die nach der Moderne sein. Auf jeden Fall ist es eine wichtige Aufgabe der Germanisten, in diesem Jahr, 100 Jahre nach dem Ersten Weltkrieg, über Krieg und Mensch am deutschen Beispiel nachzudenken.